

漢語近世音と契丹文字漢字音(3)  
—契丹小字の入声表記、僕・祿の韻尾—

吉池孝一 中村雅之

契丹小字研究の入声字

中村：『契丹小字研究』(1985)<sup>1</sup>では、21種の入声字（中古音の-kと-t）が扱われており、24種の契丹小字で表記されていました。そのうち、前回は第一段階の検討として、ほとんどの例で入声韻尾は確認されないが、55 𐰽𐰺僕と𐰽𐰺祿、84 𐰽𐰺册、85 𐰽𐰺伯、𐰽𐰺客、92 𐰽𐰺券（及び93 𐰽𐰺券）越については、入声韻尾の有無について『契丹小字研究』(1985)で扱う資料の範囲内では分からないということになり、後代の研究文献で入声韻尾についてどのような言及があるか確認しようということになりましたね。

吉池：比較的早いものとして即實(1996)<sup>2</sup>を検討しました。即實氏は契丹小字で表記された契丹語に拠って議論を進め、小字𐰽の音を ku とし、𐰽で表記される 𐰽𐰺僕と 𐰽𐰺祿に韻尾-kを認めました。我々の見たところでは、小字𐰽に音 ku を想定する議論は危ういものであり、同様の可能性で u とも想定し得るということでした。いずれの想定を採るとしても、別の根拠が必要です。次の対談で愛新覺羅 烏拉熙春(2004)<sup>3</sup>を検討する提案があり終わりました。

中村：次の文献の検討に入る前に、前回の検討の過程で出た副産物を確認しませんか。契丹小字で表記された漢語音をどのように考えるか一案が出ました。今後の検討の参考となるでしょう。

吉池：漢語中古音の疑母 ɲ の有無をめぐる議論でしたね。疑母の存否の状況は、契丹小字で表記された漢語音と『中原音韻』とはだいぶ異なっていました。『中原音韻』では声母としての ɲ は認めれないのに対して、契丹小字ではそれが明瞭に表記されています。この ɲ を実際の音の反映と見るかどうか議論になりました。前回提示した表をもう一度見てみましょう<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 清格爾泰、劉鳳翥等著(1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。

<sup>2</sup> 即實(1996)「《戈也昆墓誌》釋讀」『謎林問徑—契丹小字解讀新程』瀋陽：遼寧民族出版社、589-599頁。戈也昆墓誌は蕭仲恭墓誌銘（金・天徳2年(1150) 1942年出土）のこと。

<sup>3</sup> 愛新覺羅 烏拉熙春(2004)「遼代漢語無入聲考」『立命館言語文化研究』16(1)、121-141頁。

<sup>4</sup> 推定音は『契丹小字研究』で示されたもの。

漢語	切韻音	宋代音	契丹小字表記と音		中原音韻
儀	ŋe	ŋi	𐰺 𐰽 𐰺 i	ŋi	i
御	ŋio	ŋiu	𐰺 𐰽 𐰺 iu	ŋiu	iu
吾	ŋo	ŋu	𐰺 𐰽 𐰺 u	ŋu	u
銀	ŋin	ŋin	𐰺 𐰽 𐰺 in	ŋin	in
元	ŋion	ŋuen	𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 æn	ŋiuæ	uen
元	ŋion	ŋuen	𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 n	ŋiuæ	uen
元	ŋion	ŋuen	𐰺 𐰽 𐰺 iuæ 𐰺 n	ŋiuæ	uen
月	ŋiot	ŋua?	𐰺 iue	iue	ue

中村：これをどのように見るか。モンゴル諸語は語頭や音節初頭に  $\eta$  は立ちません。契丹語はモンゴル系の言語とされるので  $\eta$  についても同様のはずです。そうであるならば、契丹人は、契丹語の中に現れる漢語においても、契丹人が話す漢語においても、語頭や音節初頭の  $\eta$  はなく、ゼロ声母で発音したと想定することができます。それでは契丹小字に吾 𐰺 𐰽 𐰺 u など疑母に相当する表記があるのは何故か。碑石などに契丹小字で漢語語彙を表記する際には、いわば“正式な表記”として  $\eta$ -を用いたのであろうということでした。

吉池：その正式な、やや古風な表記として、漢語の役職名や地名などを契丹小字で表記した対応表が作られており、その中で、疑母を 𐰺  $\eta$  で記すことが定められていたと想定しました。これは、契丹語話者の実際の漢語音と、契丹文字表記の漢語音との間に差異があったと想定するものです。

中村：この想定が入声韻尾の有無に当てはまるかどうかを見ながら検討を進めましょう。それでは愛新覺羅 烏拉熙春(2004)<sup>5</sup>の説を確認しましょう。

### 𐰺の音について

吉池：『契丹小字研究』(1985)や劉鳳翥(2014)<sup>6</sup>は、𐰺 𐰺 僕や𐰺 𐰺 祿について、『中原音韻』の推定音僕 p'u や祿 lu により、𐰺の音を u とします。即實(1996)は契丹小字による契丹人の人名表記と漢字音訳との対応により𐰺の音を ku とし𐰺をもつ入声字に韻尾-kがあったとします。我々はいずれも決定打に欠けるとしました。この𐰺について、愛新覺羅 烏拉熙春(2004)は、契丹人の同一の人名において、『韓高十墓誌』では𐰺と現われ、『韓敵烈墓誌銘』では 𐰺 g (推定の立場の違いにより k とし得る。以下同様に丸括弧で示す。)<sup>7</sup>と現われることから

<sup>5</sup> 愛新覺羅 烏拉熙春(2004)「遼代漢語無入聲考」『立命館言語文化研究』16(1)、121-141頁。

<sup>6</sup> 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局。

<sup>7</sup> 子音の対立を g と k とする立場と、k と k<sup>h</sup> とする立場がある。前者によると g、後者に

ㄨの音を ug (又は uk) と推定し、①②とします。

① ㄨㄨとㄨㄨで表記される入声字祿 (来屋合口一入通) は lug である。

② しかし『韓高十墓誌』では淥 (来燭合口三入通) がㄨ lu で表記され入声韻尾は認められないので、祿 (来屋合口一入通) の表記にㄨが使われていたとしても遼代に入声韻尾を持っていたことを明示するものではない。

烏拉熙春(2004)の当該部分を引用しますが、引用にあたって左右上下に配置されている契丹小字を、便宜的な措置として横一列に配置します。

《韓高十墓誌》第3行有墓主人先祖之妻的名字: ㄨㄨ伏关 ㄨ及 ㄨㄨ ㄨㄨ伏;同名復見於《韓敵烈墓誌銘》第3行, 作: ㄨㄨ伏关 ㄨ及 ㄨㄨ ㄨㄨ伏。對比之下不難看出, 首一詞的第二個音字兩個墓誌所用音字不同:《韓高十墓誌》用的是ㄨ,《韓敵烈墓誌銘》用的是ㄨ。ㄨ\*əu、ㄨ\*g 的擬音已經基本確定, 則此二字拼合之音節是 əug。ㄨ字本身包含 u 元音, 若欲得出與之相同的音節形式, 必是 ㄨ\*əu+ㄨ\*ug>əug。據此, 可以推定ㄨ字的音值是 ug。

.....省略.....

既然ㄨ的音值是 ug, 那麼ㄨㄨ和ㄨㄨ這兩個音節便都是 lug。但這並不表明“祿”字在當時仍有入聲韻尾, 因為另一個入聲字“淥”是以ㄨ\*lu 音譯的(至於③中“祿”用一個ㄨ音譯之例乃是金代石刻)。見下例。

(6) 淥 (来燭合口三入通) \*liwok

“淥”的拼寫形式只有一種: 用一個兼作意字的ㄨ來表示。出處如下:

ㄨ 金和 令ㄨ ㄨ关 / 淥州之度使 [高 20]

如前所證, ㄨ的音值既是 lu, 則表明“淥”字不帶入聲韻尾。刻於金代的《蕭仲恭墓誌》用ㄨ音譯“祿”。金代北方漢語無入聲已經得到確證, 既然遼代墓誌亦用ㄨ音譯同是入聲字的“淥”, 可見遼代該韻已無入聲韻尾。

(125-126 頁)

中村:『韓高十墓誌』と『韓敵烈墓誌銘』に見える祖先の妻の名、ㄨㄨ伏关とㄨㄨ伏关ですが、これは同じものなのでしょうか。

吉池:劉鳳翥(2014)には、拓本の影印と、傍訳が付された模写資料があるので、これを利用して確認します。問題となる名前を前後を含めて、契丹小字と傍訳を劉鳳翥(2014)から引用すると次のようになります<sup>8</sup>。

よると k となる。

<sup>8</sup> 劉鳳翥(2014)は、『韓高十墓誌』を『耶律(韓)高十墓誌銘』、『韓敵烈墓誌銘』を『耶律(韓)迪烈墓誌銘』と称す。『耶律(韓)高十墓誌銘』の拓本は1137頁、模写は740頁。『耶律(韓)迪烈墓誌銘』の拓本は1164頁、模写は860頁。



した漢語と契丹小字の“対応表”（常用の役職名や地名などの対応表）によって言うならば、古風な表記として“崇祿大夫”という役職名の祿に限って𐰺𐰆 lug（又は luk）として対応表に登録されていたということでしょう。

吉池：この𐰺𐰆 ug（又は uk）ですが、役職名の“僕射”の僕の表記にも使用されます。『義和仁壽皇太叔祖哀册文』2行12字目、『宋魏國妃蕭氏墓誌銘』2行12字目、『故耶律氏銘石』2行17字目に𐰺𐰆とあるので、“対応表”には“僕射”の僕に限って古風な表記として𐰺𐰆 bug（又は puk）として登録されていたのでしょう。ところが、いまとり上げた『韓高十墓誌』の3行8字目では𐰺𐰆ではなく𐰺𐰆 bu（又は pu）とあります。こちらの方は、韻尾が消失した実際の音が顔を出したと見ることができそうです。

中村：崇祿大夫の祿や僕射の僕は表記の上では、祿𐰺𐰆 lug（又は luk）、僕𐰺𐰆 bug（又は puk）であったが、当時の漢語音ではすでに入声韻尾は消失していたとするのが穏当なところなのでしょう。

吉池：特定の単語に見られる祿𐰺𐰆 lug（又は luk）、僕𐰺𐰆 bug（又は puk）という表記をどのように理解するか問題になりますね。遼代は入声韻尾消失の過渡期かもしれず、そうであるならば、特定の単語にあっては口語においても入声韻尾を持つ人が一定数いたかもしれません。しかしそのような一部の人たちの音が正式な表記として採用されるとも考えにくいでしょう。そこで、入声韻尾が消失した当代音のほかに、古風な音を保存した“契丹漢字音”があり、その漢字音の反映とみたいののですがいかがでしょう。

中村：異存はありません。ただし、そのような“契丹漢字音”は体系的に存在したというよりは、いくつかの語彙に残存していたにすぎないと思われます。例えば、日本語で「博士」は呉音でも漢音でも「ハクシ」ですが、同時に古くから伝わる音として「ハカセ」も共存しています。そのような非体系的な古層としての漢字音が遼代にもあったということなのでしょう。それが役職名などの“対応表”に採用されることがあったのかも知れません。さて、検討すべき55 𐰺𐰆僕と𐰺𐰆祿、84 𐰺𐰆册、85 𐰺𐰆伯、𐰺𐰆客、92 𐰺𐰆券（及び93 𐰺𐰆券）越のうち、55 𐰺𐰆僕と𐰺𐰆祿はこれで終わりました。引き続き84 𐰺𐰆册以降を検討しましょう。

#### 𐰺𐰆册について

吉池：84 𐰺𐰆册について、烏拉熙春(2004)は、博州防禦使墓誌銘（金・大定10年(1170)、1993年出土）の𐰺𐰆𐰺𐰆𐰺𐰆（14行目）を、𐰺𐰆（漢字音「牌」）-𐰺𐰆（漢字音「子」）𐰺𐰆（契丹語の複数接辞）と読みます。牌 bǎi > p<sup>h</sup>ai<sup>9</sup>を𐰺𐰆で表記するので、𐰺𐰆に入声韻尾に相当する音はなく、𐰺𐰆で表記される𐰺𐰆册に入声韻尾-kは無いとします。

<sup>9</sup> この漢字音は藤堂明保(1978)による。

音字 **𠂔** 還可以用作音譯蟹攝字“牌”，如“牌子” [博 14] 作 **𠂔** **𠂔** **𠂔** **𠂔** (複數)；[仁 21] 作 **𠂔** **𠂔**；但在“印牌司”一詞中，所有的出現場合都作 **𠂔**。這種情況表明，**𠂔** 的可能音值等同於 **𠂔**。但 **𠂔** 還具有意字的用法，表示“父、男”及“年”；而 **𠂔** 却只用作音字、並且是不出現在詞首的音字。**𠂔** 作意字時的音值爲 aja；作音字時截取詞首元音及次音節的節首輔音而成爲 ai。因此可知，**𠂔** 的音值可能是或接近於 ai。(130 頁)。

中村：**𠂔** を含む 85 **𠂔** **𠂔** 伯と **𠂔** **𠂔** 客も同様に、册、伯、客はいずれも入声韻尾は無いということですね。それでは次に 92 **𠂔** **𠂔** (及び 93 **𠂔** **𠂔**) 越を検討しましょう。

#### **𠂔** **𠂔** / **𠂔** **𠂔** の字形について

吉池：92 **𠂔** **𠂔** (及び 93 **𠂔** **𠂔**) 越の入声韻尾の議論に入る前に、**𠂔** **𠂔** と **𠂔** **𠂔** の字形について確認をさせてください。『契丹小字研究』(1985)によると、越国の越の表記に **𠂔** **𠂔** もしくは **𠂔** **𠂔** が認められるのは次の 7 例です。

##### **𠂔** **𠂔** 越とするもの

- 許王墓誌 50 行 8 字目の「越國王之」。
- 蕭仲恭墓誌、誌蓋 2 行 1 字目の「越國王」。
- 同誌文 1 行 5 字目の「越國王之」。
- 同 5 行 7 字目の「越國公主之」。

##### **𠂔** **𠂔** 越とするもの

- 蕭仲恭墓誌 24 行 32 字目の「越國王」。
- 同 27 行 42 字目の「越國妃」。
- 同 46 行 9 字目の「越國之」。

中村：『契丹小字研究』(1985)で扱った石刻文は限られたものでした。それ以降に発見された石刻文に越國を漢字音として表記するものはないのでしょうか。

吉池：劉浦江・康鵬(2014:99)<sup>10</sup>を見ると、『契丹小字研究』(1985)で挙げた例と同様の例しか挙がっていません。今のところ、許王墓誌の 1 例と蕭仲恭墓誌の 6 例に限られるようです。

この 7 例について即實(1996)は下に引用するように、許王墓誌 (50 行 8 字目) の越は、**𠂔** **𠂔** ではなく、点がある **𠂔** **𠂔** とします。拓本影印によると<sup>11</sup>、たしかに **𠂔** のように、点らしきものが見えます。蕭仲恭墓誌の 6 例の「越國」は、即實(1996)が指摘するように、故意に削り取られており細部の確認が困難です。字形の一部分が残っており **𠂔** **𠂔** / **𠂔** **𠂔** もしくは **𠂔** **𠂔** / **𠂔** **𠂔** であることは推定できるのですが、**𠂔** と **𠂔**、**𠂔** と **𠂔** という細かな区別はできません。

<sup>10</sup> 劉浦江・康鵬(2014)『契丹小字詞彙索引』北京：中華書局。

<sup>11</sup> 許王墓誌と蕭仲恭墓誌の拓本影印は『契丹小字研究』(1985)所収による。

なお即實(1996)は蕭仲恭墓誌 27 行 42 字目の「越國妃」の𠄎には点があるとしますが、拓本影印による限り確認できません。



許王墓誌誌文



蕭仲恭墓誌誌蓋



蕭仲恭墓誌誌文

𠄎𠄎(越) 𠄎𠄎(國) 𠄎𠄎(王之) 𠄎/𠄎𠄎(越) 𠄎𠄎(國) 𠄎(王) 𠄎/𠄎𠄎(越) 𠄎𠄎(國) 𠄎𠄎(妃)

\*𠄎は完全に削除されている

\*𠄎の点は確認できない

中行三語，《研究》已解爲越國王。越，抄本均作𠄎𠄎，但是本行文字均經鏹削，很難確認𠄎字右邊沒有一點。第 27 行有越國妃，此越之𠄎隱約可見右旁之点。《森志》【許王墓誌：吉池】第 50 行亦有越國王，越正綴𠄎。由此可證，越字應綴寫爲𠄎𠄎或𠄎𠄎，不可作𠄎𠄎或𠄎𠄎。𠄎𠄎二字形體雖近音讀却殊。𠄎字標記契丹語之月。契丹語謂月爲“賽咿呢”。據此可斷，𠄎必讀[sær]。可見𠄎𠄎二字相綴絕難讀“越”。𠄎據𠄎字轉制，可能由賽咿呢思及漢語之月，遂以月音制字。《研究》初擬爲[iuæ]，已近實際。𠄎𠄎相綴正好讀“越”。這又表明，越應作𠄎𠄎而不可作𠄎𠄎。

即實(1996)中の「《戈也昆墓誌》釋讀」(＝蕭仲恭墓誌)(102-103 頁)

中村：我々の立場では、碑石や拓本の実物を確認することは難しく、出版された拓本影印のうち比較的鮮明なものによるしかありません。このあたりが我々の検討の限界なのでしょう。結局、𠄎𠄎のように、点の確認できそうな越は許王墓誌の 1 例のみということになりますね。1 例のみでは、碑石の損傷によって点に見えるのかもしれない、心もとないのですが、かりに越国の越を𠄎としこの音を iue もしくは ue と推定しても問題はないでしょう。それは、宣懿皇后哀册で点のある𠄎が、𠄎𠄎𠄎(宣) 𠄎𠄎(懿)の漢字「宣」の主母音の表記に使用されていることによって支持されます。

吉池：他方、点のない𠄎の音が問題となりますね。『契丹小字研究』(1985)が「～月～日」の月𠄎を漢字音としたのにたいして、先の引用文で見たように即實(1996)は契丹語として sær を当てます。清格爾泰(2002:42)<sup>12</sup>も即實(1996)により sær とします。

<sup>12</sup> 清格爾泰(2002)『契丹小字釋讀問題』東京外国語大学 A.A.研。

中村：この“月𐰺”ですが、前回我々は、『契丹小字研究』(1985)の結論を受けて、月𐰺を漢字音として検討しました。しかしその前に、漢字音であるか契丹語であるかを検討しなければならなかったというわけですね。

吉池：不確定要素も多いのですが、今の段階では、許王墓誌によって越國の表記を𐰺𐰽とした上で、𐰺の音はueとし、「～月～日」の月𐰺については即實(1996)によりsærとすることはいかがでしょう。

中村：異存はありません。先に漢語中古音の疑母ŋの有無をめぐる議論で月𐰺をとりあげ、𐰺を月の漢字音とし、月の漢字音には例外的に疑母ŋがないとしましたが、この議論は取り下げることになりますね。それでは改めて𐰺𐰽越の入声韻尾を検討しましょう。

#### 𐰺𐰽越について

吉池：烏拉熙春(2004)は、𐰽/𐰽は漢字「哥」の韻母の表記に使われるので入声韻尾はないとします<sup>13</sup>。例文を挙げないので議論の可否の判定はできません。しかし、いま例を探すと次のような音訳漢字が見つかります。耶律智先墓誌銘(大安10年(1094)、1998年出土)であり、契丹小字文と漢文が揃っています。契丹小字文11行目に、夫人の名前として𐰺𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽(夫人)とあります。劉鳳翥(2014)第三冊803頁は𐰺𐰽-𐰽𐰽に𐰺𐰽(興)-𐰽𐰽(哥)と漢字を当て興哥夫人と読みます。漢文の墓誌銘の方にも「興哥夫人」と出ているので、漢文はこの漢字の当て方を支持します。

契丹文11行：𐰺𐰽𐰽𐰽𐰽- 𐰽 - 𐰽- 𐰺𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽𐰽𐰽

姉妹 五個 大者 興 哥 夫人 【姉妹は五人、長女は興哥夫人】

漢文17行：公【耶律公】之姉妹五人、長曰興哥夫人 【公の姉妹は五人、長女は興哥夫人という】

中村：興哥が𐰺𐰽-𐰽𐰽の音訳漢字であるならば、正確さを犠牲にして文字面の良い漢字音を当てたのかもしれませんが。また音訳漢字は、しばしば、音節末音の表記を無視します。音訳漢字と原語との対応によって漢字の韻尾の有無を論じるのは危険です。𐰽に韻尾がないとは言いきれないというところでしょう。

#### 哥などの果攝一等の主母音について

中村：少し本題からはそれるのですが、上の例から哥の母音について興味深いことがあります。

<sup>13</sup> 「𐰽/𐰽尚用於音譯“哥”的韻母，“哥”屬果攝歌韻開口一等，不帶入聲韻尾。」(132頁)。

吉池：どうということでしょう。

中村：哥などの果摂一等の主母音については、近世音で [o] とするのが伝統的な説で、よく利用される楊耐思(1981)<sup>14</sup>の推定音でもそのようになっています。しかし、元代の北京音では円唇ではなく現代音と同じ非円唇の [ɣ] であったということが近年明らかになってきました。これについては長田夏樹(1953)<sup>15</sup>の再評価を契機として、吉池さんも私も論じたことがあります<sup>16</sup>。

吉池：そうでしたね。結論は、果摂一等開口の主母音は明清の官話音の発信地である南京音では円唇の [o] であり、北京では一貫して非円唇の [ɣ] であるということでした。

中村：今回の哥の契丹小字表記を見ると、その母音は越の表記の第2要素と同じです。つまり、越に入声韻尾があるかなしにかかわらず、また哥の表記が漢字音であるのか逆に哥が契丹語の音訳字であるのかにかかわらず、哥の漢語音は非円唇の母音を持っていたと考えてよいことになります。当時の越の主母音が前舌の [ɛ] に近いものであることは確かでしょうから、それを表すのと同じ文字が哥の母音としても使われている以上、哥が円唇母音をもっていた可能性はないと言えます。元代の音訳で哥がモンゴル語の/gä/に当てられていたのと同じように、遼代にも哥が契丹小字表記の ge (または ke) と対応していることになります。

吉池：そうすると、疑母 η の有無に続いて、果摂一等の主母音についても遼代の漢語の音韻は元代と大きく変わらないということですね。このことは他の項目についても参考になりそうです。

中村：だいぶ寄り道をしましたが、これで、『契丹小字研究』(1985)中の入声字の内、入声韻尾の有無の判断についてペンディングにしておいた 55 𠵹𠵹僕と 𠵹𠵹祿、84 𠵹𠵹册、85 𠵹𠵹伯、𠵹𠵹客、92 𠵹𠵹 (及び 93 𠵹𠵹) 越を検討しました。

吉池：即實(1996)および烏拉熙春(2004)により入声韻尾の有無について検討したわけですが、役職名の“崇祿大夫”の祿 𠵹𠵹 (lug 又は luk) および役職名の“僕射”の僕 𠵹𠵹 (bug 又は

<sup>14</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中国社会科学出版社。

<sup>15</sup> 長田夏樹(1953)「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第4巻第2・3、『長田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化』(ナカニシヤ出版, 2000) 所収。

<sup>16</sup> 吉池孝一(2005)「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36、16-23頁。中村雅之(2006)「近世音資料における果摂一等の表記」『KOTONOHA』39、1-4頁。中村雅之(2010)「葛・合などの元代北方音について」『KOTONOHA』91、1-3頁。

puk) に入声韻尾 (-k) が認められました。

中村：遼代の契丹人の漢語にあつては、入声韻尾の-kは元代と同様に消失していたが、崇祿大夫、僕射など、特定の語には、古風な音を保存する“契丹漢字音”として、-kが認められるということでしたね。

吉池：我々が想定した漢語と契丹小字の“対応表”（常用の役職名や地名などの対応表）にそつて言うならば、古風な音を保存する“契丹漢字音”も対応表に登録されていたということになります。なお“越國”の越~~𐰽~~𐰺の入声韻尾の有無については検討を継続するということでした。

中村：烏拉熙春(2004)は他の入声韻尾についても言及しますね。

吉池：「博」の-k韻尾、「密」の-r韻尾、「十」の-p韻尾の有無について言及があります。次回も引き続き烏拉熙春(2004)によって検討しましょう。